

既習の学習を生かして表現できる児童の育成
～資料選択と活用を手がかりにして～

新潟東支部 新潟市立江南小学校
森田 隆太（平成23年度）

【主張】

小学校学習指導要領 社会科¹では、小学校社会科における「思考力、判断力」は、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて、学習したことを基に、社会への関わり方を選択・判断する力であると述べられている。しかしながら、自分自身の指導や授業構成を振り返ると、社会に見られる課題の解決に向けて、学んできた内容を基に考えを深めたり、学んだことを自分の考えとして生かしたりする活動が不十分であった。社会事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えるためには、社会的事象に対して、根拠となる資料をもとに自分の考えを説明することが必要であると考える。そのため、児童が単元を通して、今までの学び（資料）を基に自分の考えを記述したり、自分の考えを表現する場を設定したりすることで児童が主体的に資料を選択し、根拠となる資料を示しながら表現できると考え、本研究を実施した。

1 研究主題設定の理由

小学校学習指導要領 社会科²では、思考・判断した内容を適切に伝えること（表現力）も重視されている。これは、習得した知識や技能を活用することである。つまり、資料を読み取ることで得られた知識を活用し、根拠をもって思考・判断し、資料を示しながら表現することが求められている。しかしながら、これまでの私自身の授業を振り返ると1時間単位で資料を基に自分の考えを友達に伝える学習形態がほとんどであった。また、自分の考えを表現したりまとめたりする場面では、学習を通して学んだこと（資料から読み取ったこと）よりも、インターネットや本で独自に調べた内容をそのまま発表したり、自分の考えの深まりにつながらなかつたりしている児童が多く見られた。そのため、児童は、自分の考えの根拠をどのように選択し、活用したかという判断基準が不明瞭となったり、自分の考えとして友達に伝えたりすることができていなかったりした。小原（2009）³は、「思考力・判断力・表現力」を育成するためには、①資料から必要な情報を読み取る②社会的事象の意味・意義を解釈する③事象の特色や事象間の関連を説明する④自分の考えを論述することが必要であるとしている。児童が、資料を活用して根拠をもって自分の考えをもつには、「資料から必要な情報を読み取る」と「自分の考えを論述する」の2つ場面が必要であると考え。その中で、特に「自分の考えを論述する」場面に焦点を当て、自分の考えに必要な根拠となる資料を選択させ、活用させることで、自分の考えが明確になったり、諸課題に対する自分の考えが深まったりすると考えた。

このことから、本研究は、児童が単元を通して、「資料から必要な情報を読み取る場面」で学習した内容を基に「自分の考えを論述する場面」で主体的に資料を選択・活用しながら、自分の考えを記述したり、根拠となる資料を示したりしながら表現（説明や話し合い）できるかを検証する。

2 研究仮説

単元の中に、「資料から必要な情報を読み取る場面」と「自分の考えを論述する場面」を位置付け、選択した既習の資料を基に自分の考えを構想し、説明したり話し合ったりすることで、社会的事象に対する自分の考えの根拠をもって表現することができるだろう。

3 研究方法と内容

(1) 研究方法

5年生社会科『これからの食料生産』令和4年度 新潟市立江南小学校5年2組 30名

本研究では、学級全体が資料を活用して、自分の考えを導き出せるかと、抽出児童2人の考えの根拠や討論の発言を分析することで、児童が自分の考えをどのように記述し、根拠となる資料をもとに説明したり話し合ったかを評価する。

【抽出児童】

A児：社会科は好きかというアンケートに対して「少し好き」としている。しかし、資料から読み取った情報が多くなると整理できなくなり、事実と自分の考えを分けて考えられず一面的な捉えをしてしまう。

B児：社会科は好きかというアンケートに対して「少し苦手」としている。資料に対してグラフの変化などは捉えることができるものの、そこから何が分かるかを導き出すことに苦手意識をもっている。

(2) 研究内容

本単元では、児童が既習の学習（資料から必要な情報を読み取る）を基に「自分の考えを論述」する場面を「①資料を選択し、自分の考えを記述する場面」、「②自分の考えを表現する場面」に分け、児童がどのように資料を選択し、活用しているかを資料選択の理由の記述や話し合いの内容を基に評価する。

① 「資料から必要な情報を読み取る場面」と「自分の考えを論述する場面」を単元に位置付ける（表1）

資料から必要な情報を読み取る	用意された教材に関して発見した学習問題を解決するために必要な情報を収集し、社会的事象や問題に対して「どのように、どのような」と問いかけ、収集した資料からその過程や構造・特色を抽出してまとめ、表現していく活動
自分の考えを論述する	①「資料を選択し、自分の考えを記述する場面」 社会的事象の中の問題や課題に対して「どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか」と問い、資料を根拠に自分なりの意見や考えをもち、表現する活動 ②「自分の考えを表現する場面」 根拠となる資料を示しながら、自分の意見や考えを説明したり、話し合ったりする表現活動

「資料から必要な情報を読み取る」については、児童のノートの記述や振り返りを基に評価を行う。また、「自分の考えを論述する」は、資料を選択し、自分の考えをまとめた記述や説明したり話し合ったりした内容を基に評価を行う。

② 既習の資料を再提示する

自分の考えを論述するために、既習の資料を取り上げ（再提示）、児童に自分の立場に合う資料を選択させる。既習の資料を基に自分の考えに根拠を付け加えていくことで、児童は、学びを生かすことができる。

③ 自分の考えを表現する討論場面の設定

討論活動を設定することで、児童が既習の学習（資料）を活用することができる。また、児童が共通して、既習の資料を基に討論を進めることで、児童同士が一定の同じ知識や情報を有した中で話し合いをすることができる。杉浦（2013）によると、「討論は、授業展開の中でそのまま討論に入るのは、難しい。自分の意見をもったり積極的に発言したりするには、一定の知識と論理の準備が必要となる。だから、あらかじめ相反する立場を決めたり、発言のために準備をしたりする必要である。4」⁴と述べている。そこで、本研究では、討論場面で題材に関する賛成・反対の意見が対立する立場と生産者と消費者の立場からなる4つの立場を児童に選択させ、それに合った意見をあらかじめ考えさせることにする。生産者・消費者など複数の視点に立ち、話し合わせることで社会的事象を多面的・多角的に捉え、深い学びにつながれると考える。

4 研究の実際 5年生社会科『これからの食料生産』

本単元の学習計画は、単元の1時間目の児童の振り返りや疑問を基に作成した。単元計画は以下のとおりである。

<単元計画（表2）>

1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目
日本の食料自給率や外国からの食料の輸入を比較し、日本の食料生産の現状について捉える。	国産と外国産の食材を比較することを通して、国産と外国産の食材のメリットとデメリットについて捉える。	日本の食料生産に関わる人たちは、食料生産を高めるためにどんなことをしているのかを捉える。	輸入に賛成の生産者と消費者に分かれて、その立場で資料を選択し、自分の考えを明らかにする。	「輸入を減らして、生産量を増やすことに賛成か。反対か。」を生産者（賛成・反対）と消費者（賛成・反対）の4つの立場に分かれて討論を行うことを通してそれぞれの考え方の違いに気づき、多様な考えにふれることで多面的・多角的に国内の食料生産の課題を捉える。	国内の食料生産を発展させるために、私たち（消費者）にできることについて考えを深める。	国内の食料生産を発展させるために、自分や周りの人がどうしていけばよいか考えをロイロノートにまとめる
資料から必要な情報を読み取る	資料から必要な情報を読み取る	資料から必要な情報を読み取る	資料を選択し、自分の考えを記述する	自分考えを表現する	資料から必要な情報を読み取る自分の考えを記述する	自分の考えを表現する
<資料から読み取れる情報> ・食料自給率が下がっている。 ・日本は肉や小麦など多くの食料を輸入に頼っている。	<資料から読み取れる情報> ・国産よりも外国産の食品が安いものがある。 ・国産のものは新鮮なものが多い。 ・外国産のものも検査を受けている。 ・日本では生産できないものは外国から輸入している。	<資料から読み取れる情報> ・地産地消 ・フードロス ・規格外の商品で消費を上げる取り組み ・米農家 日本人の食の変化。生産しても買ってもらえなければ生産を増やしても仕方がない。 ・ぶどう農家 生産を上げると木や人が疲弊してしまう。		<資料から読み取れる情報> 立場によって輸入を減らしたり増やしたりするメリットやデメリットがわかる。	<資料から読み取れる情報> ・生産者は、食料を加工して販売している。 ・産地直産や直売所 ・消費者は旬のものを買う ・地産地消 ・日本型の食生活	

(1) 資料から情報を読み取る場面（1～3時間目）

単元の1時間目は、国産の食材のみで作った給食の写真を提示し、日本の食材は、どこから入手しているかについて学習を行った。その際、日本の食料自給率が下がっていることや小麦や肉類などは、1980年以前から外国からの輸入に頼っていることを児童はグラフから明らかにした（別紙図1）。

2時間目は、国産と外国産の肉類や果物を比較した。そして、値段や安全性、新鮮さ、美味しさなどを視点として調べ活動を行い、外国産（輸入品）のメリットやデメリットを考えた（別紙図2）。

3時間目は、日本が食料生産を高めるために企業や生産者、販売者がどんな取り組みをしているかや生産者の思いや悩みを米農家（米作りを教わった方）とぶどう農家の話から読み取りを行った（別紙図3）。

A 児のノート記述や振り返りから、この3時間目までの学習を通して、日本の生産や食料自給率が減少していること、外国産を輸入するメリットとデメリットがあること、工場や会社で食料を増やす工夫をしていることを資料から読み取ることができた（別紙図4）。

B 児は、日本が輸入に頼っていること、外国産の安い商品は消費者にとって嬉しいものだが、生産者には、困るものであること、日本のお米の安全性が高いことなどを資料から読み取ることができた（別紙図5）。

(2) 資料を選択し、自分の考えを表現する場面（4時間目）

児童の疑問を基に、討論の題材を決定した。児童は、前時までの学習で「輸入を減らした方がよいのか。」「それとも輸入を増やした方がよいのか。」という疑問をもっていた。そこで、日本の食料生産の問題を改めて問い直すために、「輸入を減らして、生産量を増やすことに賛成か。反対か。」という議題を、賛成の生産者・消費者と反対の生産者・消費者の4つの立場に分かれて、討論を行うことにした。討論を成立させるために、4つの立場の中から班の中で話し合い、それぞれの立場に分かれさせた。そして、これまでの既習の学習を生かし、自分の考えを記述するため、これまでに児童と考えてきた資料を改めて提示した。

児童は、今まで扱ってきた資料であったため、自分の立場を理解すると、30人中26人が自分の立場に合った資料を選択し、その選択した資料を根拠に自分の考えを記述することができた。

資料を選択することができたが、その立場の意見として適さないものや論理的に意味が通じない児童が4人いた。その児童は、まず自分の立場を理解できていなかったり、資料からその立場に合った情報を読み取れなかったりしていた。そのため、例を示しながら、個々に説明をしたり、他の児童からどの資料を選んだかというヒントをもらったりすることで資料を選択し、自分の考えを導き出すことができた（別紙図8）。

A 児は、輸入を減らし、国内の生産量を上げることに**反対の生産者の立場**として、(キ)と(ク)の資料を使い、ぶどう農家が抱える生産を増やすデメリットに着目し、自分の理由の一つにしていた。また、自分が調べた国産のみの食事の資料と(ケ)の地産地消やフードロスをなくす取り組みを結び付け、日本の食料問題について自分の考えをまとめた（別紙図6）。

B 児は、輸入を減らし、国内の生産を上げるのに**賛成の消費者の立場**として、(ア)と(ケ)の資料を選択し、日本のお米や野菜の安全性や美味しさについて自分の意見をまとめた。B 児は、既習の学習を生かし、資料から読み取った情報を自分の根拠としてまとめることができた（別紙図7）。

(3) 自分の考えを表現する場面（討論場面）（5時間目）

ここでは、議題「輸入を減らして、生産量を増やすことに賛成か。反対か。」を生産者（賛成・反対）と消費者（賛成・反対）の4つの立場に分かれて討論を行った。この討論は、それぞれの立場による考え方の違いに気付き、多様な考えにふれることが目的である。児童は、ロイロノートで作成した資料を基に、発表を行い、その後それぞれ質疑応答を行いながら、話し合いを進めた（表3）。

B 児は、A 児の「価格と安全性のどちらを優先するか。」という質問に対して、自分の意見でもある「安全性」について、既習の知識を生かし、消費者としての目線で「外国産の安全性」について意見を述べていた。

また、A 児は、賛成の消費者の立場であるB 児の「国産のものを増やせば、安全なものももっと安く食べられるのではないか」という質問に対して、資料(キ)のぶどう農家の話を基に、「今の取り組んでいるものを増やすのも限界がある、規格外の野菜を店に出そうとすると売れなくなったり、国産のものが安くなりすぎたりして生産者が困ってしまう」という生産者の視点で論を進めていた。A 児もB 児も、既習の資料を基に、資料から読み取れる情報を活用しながら、そこに自分の考えを付け加え、討論を行うことができた。これは、既習の資料から読み取った知識を、自分の考えとして表現した姿であると考えられる。

<討論の一部(表3)>	
A 児<反対・生産者>	例えば外国産トマト100円 日本トマト500円です。無理をしまで、安全を考慮しますか。
B 児<賛成・消費者>	外国産のものは本当に安全なのですか。
C 児<反対・消費者>	外国産も衛生法に基づいて審査をしている。(衛生法の資料をもとに説明)
B 児<賛成・消費者>	それでも外国産のものは全部行っているわけではない。
A 児<反対・生産者>	小麦は、日本では生産しにくい気候。だから外国産を買わないと小麦を使った食料を食べられなくなります。あなたは、どう思いますか。輸入を減らしてまで、食べたいものを食べられないのですが、いいのですか。牛乳も2週間に1度しか食べられないですよ。
B 児<賛成・消費者>	国産のものを増やせばいいのではないか。そうすれば、自給率も上がりますよね。
A 児<反対・生産者>	今の取り組んでいるものを増やすのも限界がじゃない。(ぶどう農家の話をもとに説明)規格外の野菜を店に出そうとすると売れなくなったり、値段が安くなったりして生産者が困ります。
B 児<賛成・生産者>	輸入できるものを輸入していくとよいのではないか。
A 児<反対・生産者>	それは、輸入が増えるのではなく現状維持ではないか。

(4) 自分の考えを表現する場面（6・7時間目）

6時間目は、5時間目に国内の食料問題について明らかにしたことを基に、「国内の食料生産を発展させるためにどうすればよいか。」という課題について生産者と消費者の視点で改めて学級全体で話し合いを行った。既習の資料や5時間目に自分が発表した資料を手がかりにどんなことができるかを話し合った（別紙図9）。

7時間目は、6時間目を踏まえて、自分たちや日本人がどのように取り組んでいけばよいかという視点でロイノートにまとめた（別紙図10）。

A児は、生産者の苦労を踏まえつつ、フードロスを意識して減らしていきたいという消費者（自分）の取り組みを加えて自分の意見をまとめていた（表4）。

B児は、学習を通して、日本の輸入の現状を理解し、好き嫌いをしないことや一人一人がフードロスをなくす取り組みを行っていくことが大切であると振り返っていた（表5）。

自分の考えを表現する場面や説明する場面を生かし、学習したことと自分にできることの2つを取り入れた記述ができていた。

<表4 A児の振り返り>

外国からの食料の輸入、フードロスを減らす工夫で地産地消をしていることが分かりました。今まで、残してもたいして変わらないと思っていたけど、今回の授業で一回一回の食料の大切さ、作る大変さが分かりました。これからは自分だけでも意識してフードロスを減らしていきたいです。

生産者の視点を取り入れた振り返り

<表5 B児の振り返り>

学習してわかったことは、日本はとても輸入に頼っているのに国内のフードロスがたくさんあることがわかりました。輸入は、今すぐ減らせないと思うので、一人一人の気持ちが大切だと思います。まず、私は、好き嫌いが多いと思うので、好き嫌いをなくして残さないようにして食べたいと思います。他にもフードロスをなくす取り組みとして、ここで紹介したイレギュラーズのところにある食品を食べることが大事だと思いました。

日本の現状と消費者の視点を取り入れた振り返り

5 研究成果と今後の課題

(1) 研究の成果

<資料を選択・活用して自分の考えをもつことができる。 (表6) >

	できる	まあできる	あまりできない	できない
前	67% (20人)	20% (6人)	13% (4人)	0% (0人)
後	87% (26人)	13% (4人)	0% (0人)	0% (0人)

<資料を活用して自分の考えを友達に伝えたり、説明したりすることができる。 (表7) >

	できる	まあできる	あまりできない	できない
前	63% (19人)	23% (7人)	13% (4人)	0% (0人)
後	80% (24人)	20% (6人)	0% (0人)	0% (0人)

表6の結果から「資料を選択・活用して自分の考えをもつことができる」と回答した児童は26人であった。既習の資料を基に、資料を選択したことで自分の立場に合った資料を選択することができた。抽出児であるA児やB児は、生産者や消費者の立場で日本の食料問題を考え、資料と自分の考えをつなげて考えることができていた。これは、複数の資料から分かる情報を読み取り、自分の立場に合った資料を選択し、考えを導き出した姿であるといえる。

また、表7から、既習の資料を基に考えさせたことで、資料を活用して自分の考えを友達に伝えたり、説明したりすることが「できる」と回答した数値が80%を上回った。抽出児A児は、どちらのアンケートに対しても授業前は「まあできる」であったのに対して授業後が「できる」と評価した。抽出児B児は、「資料を選択・活用して自分の考えをもつことができる。」では、「あまりできない」から「できる」に、「資料を活用して自分の考えを友達に伝えたり、説明したりすることができる。」では、「まあできる」から「できる」と評価した。これらの結果から、既習の資料やそこから分かる情報（知識）が児童の話し合いの土台になったと考える。社会的事象に対する自分の考えに根拠をもって表現するために、既習の資料を再提示したり、資料を選択し、記述させる場面や自分の考えを表現する討論場面を設定したりしたことは有効であったと考える。

(2) 今後の課題

本実践では、資料活用場面を討論に設定し、4つの立場で話し合わせた。そのため、多くの資料を読み取ることが必要となり、一つ一つの資料に対して、より深い理解に至らない児童がいた。資料から必要な情報を読み取る場面で資料を精選したり、資料に対する理解を深めたりする場面を十分に確保する必要があった。また、もともとの自分の考えと真逆な立場で考えなければならなかった児童がいたり、討論の中で、自分の立場である生産者ではなく消費者の立場（自分を基準）で意見を述べる児童もいたりした。そのため、自分の意見や適した資料を基に話し合えるような討論の構成を考えていきたい。

注

¹ 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』日本文教出版、2018年。

² 同上。

³ 小原友行『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン 小学校編』明治図書、2009年、P.11-12。

⁴ 杉浦正和「ディベート・討論学習はどのように進めたらよいか」二谷貞夫ほか『中等社会科ハンドブック』学分社、2013年。